

丹念さと問題意識と

中島 国彦

書物として読者の前に差し出されたものには、おのずと著者の風貌が滲み出てくるものがある。大部の学術書と多くの人に読まれる選書との違いはあるものの、今回受賞作を並べると、研究のスタイル、読者をどう意識するか態度など、幾つかの点でそれぞれの特徴が際立つように感じられた。

大橋毅彦『昭和文学の上海体験』は、一九二〇年代後半から敗戦に至る時期の上海という場所に、昭和文学にちりばめられたさまざまな人物の営為が、まさに渦巻くように流れ込む姿を、緻密な調査と、人物に対する温かい眼で描き出す。わたくし自身、本書の中核となった学位論文の審査に当たった立場でもあり、選考の席では発言を控えたが、お二人の選者から高い評価を受けたのはうれしい。

石原千秋『漱石と日本の近代』は、『反転する漱石』での新鮮な発言から二十年近く経った今、その間の漱石研究の動きに丹念に反応しつつ、今回「女の謎」「漱石的主人公」という視点を前面に押し出して、明快にまとめ上げた漱石像である。大橋氏の著書に、池田克己・室伏クララ・プロッホなどの人物のドラマを浮かび上がらせる物語性があるとすれば、石原氏の著書は、最近の若い研究者の業績についても触れており、学術上の先端を行く目配りが感じられるのが面白い。著書の表題に「近代」という語が使われているが、『坊っちゃん』から『明暗』に至る作品を順に分析するスタイルは、読者の支持を得るに違いない。

研究と「読者」の間

関川 夏央

今年は何年にも増して力作、労作が並んだため選考に苦勞した、というのが選考委員の一致した感想であった。

大橋毅彦『昭和文学の上海体験』（勉誠出版）は、「外国租界」として奇妙な繁栄を謳歌した一九三〇年代から四〇年代にかけての上海市街と、そこで活動した日本文学者、ジャーナリスト、翻訳者らの姿を、綿密な調査によって活写した力作である。一三五〇枚という質量に圧倒されながらも、すでによく知られた林京子などとどまらず、池田みち子、室伏クララ、ユダヤ人芸術家のD・L・プロッホらの存在と仕事に光を当ててゆく手際には、まさに間然するところがなかった。

石原千秋『漱石と日本の近代』（上）・（下）（新潮選書）は、多くの実績を積んだ著者の、漱石研究における決定版といえるだろう。

とくに、明治三十一年施行の明治民法による相続と扶養義務の明確化が漱石の創作に多大な影響をおよぼしているという指摘は、スリリングかつ説得的であり、刮目させられる思いを味わった。年若い研究者たちの論文からの引用が著作中の随所に見られるが、そこからは、ただごとではない著者の目配りの周到さ、また後進に対するいたわりと愛着の念の深さを実感できる。

作品の読みと現地調査

兵藤 裕 己

石原千秋『漱石と日本の近代』は、漱石と「日本の近代」との関係をも、石原氏らしい鋭利な文体で解き明かした本である。氏によれば、漱石が作家デビューした明治三〇年代末は、漱石作品の読者となる東京山の手の中産階級が形成された時代である。かれらは近代の知識人の苦悩の特権的に悩むことのできた有閑層でもあるが、そんな漱石文学の読者＝主人公たちが抱えこんだ自我や心の問題は、二一世紀を生きる私たちのそれを先取りするものだったという。現代思想にも目配りのきく石原氏が、学界の漱石研究の動向や成果を丁寧に紹介しながら、それを読みやすい文章で一般読者・文学愛好者へ向けて開いた意義はきわめて大きい。

大橋毅彦『昭和文学の上海体験』は、二〇世紀前半の上海という、西洋と東洋が入り混じる特殊な都市空間で展開された日本語文学を研究した大著である。上海で発行された新聞・雑誌類の文献調査をもとに、当時の日本人作家たちの活動が掘り起こされ、それを跡づける現地調査が行われる。一九八〇年代以降、中国の都市が急激に変貌してゆくなかで、大橋氏の世代にしてかろうじて可能であった研究といえるだろう。なかでも、「上海社交界の花形」だった室伏クララにかんする論考は興味深かったが、上海で亡命生活を送ったユダヤ人画家、プロッホの足跡をたどる現地調査の報告も、読み物として大変スリリングだった。